

ローザンヌからマニラまで

—— マニラ宣言全文訳及びその解説付 ——



Let
the Earth hear
His Voice

Lausanne Committee for World Evangelization

関西ミッション・リサーチ・センター 日本福音同盟

ローザンヌからマニラまで

—— マニラ宣言全文訳及びその解説付 ——

目

次

「マニラ宣言」

まえがき	一
二の確認事項	一
A. あまねく福音を伝えよ	三
(一) 人間の状態	四
(二) 現代へのよきおとづれ	五
(三) イエス・キリストの独自性	六
(四) 福音と社会責任	七
B. すべての教会	八
(五) 福音宣教のための担い手であられる神	九
(六) あかしの働き	一〇
(七) ひたすらなあかし	一一
(八) 地方教会	一二
(九) 伝道における協力	一四
C. 全世界に	一五

(一〇) 現代社会	一五
(一一) 二一世紀を望んで	一〇
(一二) 現代の世界	三一
(一三) 西暦二〇〇〇年とそれ以降の挑戦	三二
(一四) 苦難五、結び	三三
(一五) 困難な状況	一〇
むすび、キリストが再び来られるまで	二〇
「ローザンヌ運動のこれから」舟喜 信	二一

「第二回世界伝道会議に参加して」内田和彦	二五
一、はじめに	二五
二、全福音	二六
(一) 罪の問題	二六
(二) 社会の責任	二六

(三) キリストの独自性	二七
三、全教会	二八
(一) 聖霊の力	二八
(二) 信徒や婦人の重要性	二九
(三) 地域教会の優先性	三〇
(四) 伝道における協力	三〇
四、全世界	三一

誓約・第一〇項	伝道と文化	四〇
誓約・第一項	教育とリーダーシップ	四〇
誓約・第二項	霊的闘争	四一
誓約・第三項	自由と迫害	四二
誓約・第四項	聖霊の力	四二
誓約・第五項	キリストの再臨	四三
誓約・結び		四三

「ローザンヌ誓約」

誓約・序文	三五	
誓約・第一項	神のみ旨	三五
誓約・第二項	聖書の權威と力	三五
誓約・第三項	キリストの独自性と世界性	三六
誓約・第四項	伝道の本質	三六
誓約・第五項	キリスト者の社会性	三七
誓約・第六項	教会と伝道	三八
誓約・第七項	伝道における協力	三八
誓約・第九項	伝道的責務の緊急性	三九

序

文

古 山 洋 右

今から十六年前の一九七四年七月に、スイスの景勝の地、レマン湖畔ローザンヌで世界百五十か国から、二千七百名の参加者を集めて開かれた、世界伝道会議（I C O W E）は、福音宣教の歴史に、忘れることのできない深い足跡を残す、意義深い会議となった。

ローザンヌの地名から、ローザンヌ運動と名付けられた、この宣教のうねりは、その後、世界の各地に大きなインパクトを与え続けてきている。主イエス・キリストの宣教大命令がグローバルなものであり、キリスト御自身の再臨が切迫していると信じられる終末の時代にあつて、私達の果たすべき使命は、当然のことながら、私達の世代に福音をすべての造られたものに宣べ伝え、あらゆる国人を、キリストの弟子とすることである。

第一回ローザンヌ世界伝道会議の参加者によって署名された、「ローザンヌ誓約」は、それ以来、現代の福音派の宣教に関するコンセンサスのな基準として受け入れられ、多くの国語に翻訳され、福音主義の代表的な立場としての地歩を確立してきたのである。

「ローザンヌ誓約」は、「現代の福音的信仰」というタイトルで、訳出されることになり、宇田進博士によって翻訳された。これは、誓約の起草者である、ジョン・ストット博士の解説と注釈つきであるから、ローザンヌ精神を正しく理解するための格好のテキストであると云えよう。

さて、第二回ローザンヌ世界伝道会議はフィリピン首都マニラにおいて、世界約百七十か国から、三千人の指導者を集めて、一九八九年七月に開催された。それには日本からも多くの先生方や兄弟姉妹が参加することができて、大変幸いであつたと思う。

この会議は、ローザンヌの流れを踏まえて、さらにそれを発展させたものである。「主が再臨されるまで、キリストを宣べ伝えよう」を主題に、「全世界に福音をあますところなく宣べ伝えるために召し出されているすべての教会」に対しての呼びかけとして招集されたところに、深い意義があつたと云えよう。その成果は、「マニラ宣言」に集約されている。

このたび、関西ミッション・リサーチ・センターによつて、「マニラ宣言」の全文が翻訳され、同会議に参加された、舟喜信氏、内田和彦氏らの解説を付して日本の福音宣教に立つ、すべての教会とクリスチャンにおとだけできることは、まことに喜ばしいことであり、主の御名を賛美せずにはおられない。

筆者は、「ローザンヌ誓約」とともに、「マニラ宣言」が、多くの教会や伝道団体によつて、テキストとしてとりあげられ、信徒レベルでの学びができるようになることを心から望んでおり、そうなることを願いつつ、ここにお勧めする次第である。

一九九〇年七月一六日

(関西ミッション・リサーチ・センター理事長)